

編集後記

本誌は、巻頭言及び発刊詞に述べられているように、二松学舎大学二十一世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の事業の一環として刊行されるものである。本誌の刊行については、本プログラムが採択された二〇〇四年（平成十六年）の年末頃から本プログラムの事業推進担当者の一部の間では話題にのぼっていたが、正式に発刊が決まったのは二〇〇五年（平成十七年）の五月、編集委員会の発足は翌六月のことであった。

編集委員には拠点リーダーの高山節也、事業推進担当者の磯水絵、小川晴久、佐藤一樹の計四人が選ばれ、編集委員長は私、小川晴久が担当することになった。ほかに、本プログラム申請時の大学院文学研究科中国学専攻主任であり、申請書作成者の一人であった佐藤保氏がオブザーバーとして参加した。国際的な学術専門誌にしては刊行までの時間的な余裕が少なく、短期間での編集作業は決して容易ではなかったが、幸い多くの寄稿者の熱意と編集委員、佐藤保氏及び事務局の金井晃主幹ほかの努力などに支えられて、創刊号の刊行にまでこぎつけることができた。

本誌の内容は、研究論文・研究ノート・研究資料・書評等、すべて公募原稿と依頼原稿から成るが、掲載に当たってはこの二つを特に区別していない。いずれも執筆期間が約三ヶ月という短い時間であったにも拘わらず、総て十六編の原稿が集まったこと、特に公募に関しては、国内外から英文原稿二編を含む十三編の応募があったことは、編集

委員の予想を超えた嬉しい驚きであった。公募論文はそれぞれの分野の専門家による厳密な査読の結果、四編だけを採用したが、すべての投稿者並びに査読に当たられた諸氏には、深く感謝申し上げる。また、執筆中に父君の死に遭遇されたボーゲン氏、重度の難病（ALS）をこらえて原稿を寄せられた角林氏には、特にここにそのお名前を記して、謝意を表したい。なお、角林氏は昨年二〇〇五年十二月二十五日に逝去された。深く哀悼の意を表する。

最後に編集に携わった一人として、個人的に感じたことを記させていただく。

本誌の刊行は本プログラムが始まって二年目に入った時点でのことであるが、編集作業を通じて、私自身は「日本漢文学」の内容と範囲（諸領域といってもよい）を探索し、把握する途上にあつた。編集を終える今となって、漸くそれが見えてきたように思う。一口で言えば、「漢文」の広がりである。例えば、日本語の文語体は漢文訓読体を基に作られたと思われるが、森林太郎（鷗外）訳『即興詩人』（アインデルセン）が「国語と漢文とを調和」（鷗外題言）せんとした訳であることを知り、明治期には一般的であつた文語体の文章も、広い意味の日本漢文学の作品と考えていいことがわかった。今後、このような文語体のジャンルをも積極的に研究の対象として行けば、「日本漢文学」の範囲は格段に広がり、本プログラムの重要度もますます高まるであらう。

（小川晴久）